

### 332. 新発見 近江の南玄関の遺跡

－関津遺跡の調査成果Ⅰ－

#### 1. 湖南アルプス・田上山の麓から

標高433mの笹間ヶ岳は湖南アルプスや田上山たなかみやまといった名称で登山者に親しまれている太神山塊たなかみにある山々のひとつで、山麓にある大津市関津の集落から登山道を一時間ほど行けばその頂きにたどり着けます。そこからは比叡の山並み、琵琶湖の南湖、石山台地や瀬田丘陵、そして眼下に瀬田川の東側に広がる田上の平野を一望できます。

その田上低地の西南部、瀬田川と田上山麓に接した大津市関津一丁目・五丁目地先の水田地帯に広がっているのが関津遺跡で、平成14年の秋に実施した試掘調査で新たに発見された遺跡です。関津遺跡の北側には弥生時代の太子遺跡があり、その南側一帯で計画されたほ場整備事業に先立つ発掘調査で、縄文時代から近世に至る遺跡の存在が明らかになりました。

関津遺跡の背後に控える田上山は『万葉集』に藤原宮造営に用いる檜を伐り出した山として詠われ、奈良時代には造東大寺司が管轄する田上山たなかみさんきくじよ作所が置かれるなど、古代において中央の建築用材を産出した柚すまとし

ての知られており、その山麓にある関津遺跡は伐り出された材木が筏いかだに組んで流された瀬田川沿いに立地しています。また、関津遺跡に近接する瀬田丘陵や南郷・田上周辺地区は古代における国内有数の鉄生産地であり、木材同様に鉄も関津遺跡付近の田上低地の一角を経由して供給先へと搬出されていたものと思われます。琵琶湖から流れ出る瀬田川は関津集落の西側あたりから川幅が狭く流れも急になり、琵琶湖へと繋がる舟の往来は関津付近までとなるため、このあたりは水運の発着拠点としての機能を備えていました。陸路では関津遺跡の西南にある関津峠を越えて京都府宇治田原町経由で木津川沿いの城陽市市部へと抜ける道筋が、足利健亮氏が「古東山道」と考え、『続日本紀』に「田原道」と記された幹線道です。関津遺跡は大和国から山背国の山あいの道を辿って近江国に入って最初に出会う広い平野部の入り口部分、まさに近江の南玄関口といえる位置に立地しており、木材や鉄の生産地にも近い、物と人が行き交う水陸交通の拠点としての機能が古代の関津遺跡が備えていた最も重要な特質だといえます。

ここでは平成15年度に実施した関津遺跡における初めての発掘調査で得られた主な成果を紹介します。

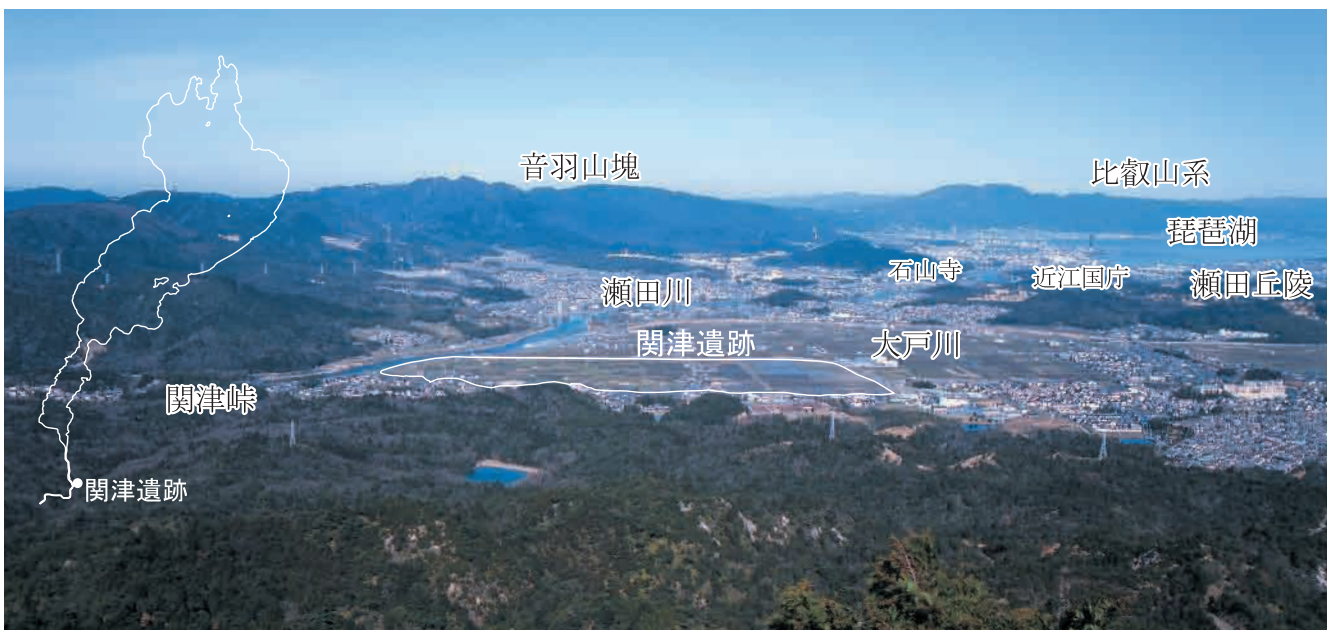


写真1 関津遺跡の遠景 笹間ヶ岳から北西方向を望む

## 2. 関津遺跡のあけぼの

関津遺跡の発掘調査では縄文時代草創期の有舌尖頭器<sup>ゆうぜつせんとう</sup>や縄文時代晩期の土器棺墓が確認され、遺跡の発見から1年足らずにして関津の歴史は一気に約1万2千年前にまで溯ることになりました。

縄文時代草創期の特徴を持つ有舌尖頭器はチャート製で、長さ6.8cm、最大幅2.3cm、厚さ9mm、重さ12.3gを測ります。先端がわずかに欠けていますが、ほぼ完全な形で出土しました。側縁の両側がわずかに膨らみながら先端に至る形状で、両面全体をやや深い加工で整形し、側縁部付近は細かく連続する加工で鋭く仕上げられています。茎部と呼ばれる根本部分は側縁をやや内湾させながら削り出していて、こういった特徴を持つ打製石器には有舌尖頭器という名称が与えられ、狩猟に使う槍先だと考えられています。この石器は13世紀後半以降に堆積した洪水砂から平安時代後期頃の土器などと共に出土しており、縄文時代の遺構に伴うものではありませんが、関津遺跡周辺が縄文時代草創期に生きた人々の活動圏内であったことを示しています。

縄文時代晩期の土器棺墓(約2,500年前)は口縁部と肩部に凸帯を貼り付けた深鉢を棺とし、その大きさに合わせるようにして地面を掘りくぼめた穴に横向けに据え置かれ、上から押し潰されたような状態で見つかりました。接合して復元すると関係品になりました。土器は高さ51.0cm、口径37.0cmの大きさに、貼り付けられた2条の凸帯にはO字形の押圧による刻みが施されています。土器表面には煤が付着しており、煮炊きに使われていたものを棺として転用したようです。



写真2 縄文時代草創期の有舌尖頭器



写真3 棺に使われていた縄文時代晩期の深鉢

この遺構の他には縄文時代後期初頭(約4,000年前)の土器や石器が出土した自然地形の落ち込みが確認されています。住居跡などは未発見ですが、縄文時代後期以降、田上山麓の扇状地形と大戸川や瀬田川の氾濫原が接する水辺の微高地上に集落が形成されていた可能性が発掘調査の成果から考えられるようになってきました。

## 3. 墨書土器の出土に見る古代関津の役割

1年目の調査で最も注目された出土遺物は飛鳥時代の墨書土器<sup>ぼくしょどき</sup>でした。土師器<sup>はじき</sup>の杯の底部外面に「岡」の異体字である「罍」をさらに省略した「罍」と、その下に字画の下半が欠損した「古・丈・大・七・本」などが想定される文字が記されている可能性があるものです。土器は口径17.6cm、器高6.7cm、底部に丸みのある浅い半球形で、口縁端部を小さく外反させ内側に丸みのある内傾面を伴っています。体部の内面には細かく密な暗文、外面上半部には横方向のミガキを施した精良品で、器形や仕上げ方法の特徴などから7世紀第2四半期頃の飛鳥地域からの搬入品だと考えられます。滋賀県内ではこれまで1,100点以上の墨書土器が出土し、その多くは幹道周辺の奈良時代の官衙や官衙的集落、紫香楽宮などで見られますが、7世紀中頃にまで溯るものは関津遺跡の事例が初めてです。国内では飛鳥地域において7世紀中頃に寺院を中心に墨書土器が出現し、多様な労働力が集まる工房や宮の造営現場などで次第に普及し、地方においては奈良時代の律令制度の整備浸透過程においてその出土例が増加すると理解されています。関津遺跡の墨書土器はその変遷

過程においても初現期に位置づけられるものとなります。

県内はもとより飛鳥地域でも初現期にあたる墨書土器が関津遺跡で出土したのはなぜでしょうか。背景のひとつに中央と地方を結ぶ水陸交通の要衝の地という立地条件を挙げることができます。近江の南玄関口のこの地は、中央と東国との物や人の行き来を押さえる上で重要で、瀬田川の流れと関津峠への陸路を見下ろす瀬田川東岸の丘陵上に造られた大日山古墳群はこの地の要衝としての役割と畿内との政治的関係を示しています。また、関津遺跡に近い瀬田丘陵周辺や南郷、田上山山麓地区には国内有数の古代製鉄遺跡群があり、7世紀中頃から後半にかけて南郷遺跡や源内峠遺跡で鉄生産が開始されています。古代の鉄生産は国家の関与の下で操業されたと考えられ、生産に関わる人々がこの地を往来し、生産された鉄素材の多くも関津峠を越えて消費地の大和国へと運び出されたと思われます。さらに背後にある田上山では『万葉集』の「藤原宮の役民の作る歌」から7世紀末頃からの森林開発が知られていますが、それより以前に飛鳥周辺では森林伐採による山の荒廃が進展し、飛鳥以外の地域から宮殿や寺院の建築用材を調達する必要が生じていた可能性が高く、関津遺跡での墨書土器の出土を考え合わせると万葉集以前の段階から田上山系での森林開発が開始され、奈良時代の山作所のような機能を備えた施設が関津周辺に置かれていたとも想定されます。鉄や建築用材の生産地に近いこの地域の様相は、飛鳥地域で多様



写真4 飛鳥時代の墨書土器と墨書



写真5 飛鳥時代の竪穴建物が見つかった調査区と田上山

な労働力が集中する工房や宮都の造営現場を中心に墨書土器が普及していったことも共通しています。確認した7世紀代の遺構は竪穴建物7棟とそれらと同時期の可能性がある倉庫と見られる掘立柱建物2棟などです。その在り方には官衙的な性格などは読み取れませんが、墨書土器の出土から生産地に近い物流拠点としての機能を備えた施設が存在した可能性も考えられ、律令国家体制の整備過程において関津周辺の地が相応の役割を担っていたことがうかがえます。

奈良時代になると遺物に見られる官衙の様相はさらに顕著になります。南北方格地割に近い方向に伸びる溝が数条検出され、大和からの搬入品と見られる内面に暗文を施した精良な土師器や墨書土器、銅銭、人形代などが出土しました。次年度以降の調査で発見された「田原道」と見られる道路跡やその両側に配置された官衙的な建物群は、今回の調査で出土した遺物からその一部が垣間見えていたようです。

#### 4. 中世集落への変貌

飛鳥時代から奈良時代にわたって見られた官衙の様相を備えた遺跡の動向は、平安時代になって暫くすると一旦衰退したかのような展開を見せます。1年目の調査範囲で再び遺跡の様相に活況が見られるようになるのは平安時代中頃以降で、鎌倉時代中頃まで続く建物群が形成されます。11世紀後葉頃に形成されはじめたその集落は、掘立柱建物や井戸、墓、溝などで構成され、掘立柱建物は調査地周辺および田上低地のほぼ全域に認められた水田地割とほぼ同じ向きで整然と配置されていました。溝もそれらとほぼ同じ方向で直線的に伸びていますが、屋敷地を囲み込んだり屋敷地内を細かく区画する溝ではなく、基幹水路的な機能を備えたと見られる溝で、その年代から11世紀後葉から12世紀前半頃に方格地割の施行を伴う農地開発がこの地域で行われたことがわかりました。

中世の出土遺物で特徴的なのは大和型の<sup>がき</sup>瓦器碗が主流を占めていることや、中国製磁器などの搬入品が多く出土している点です。大和型が主流を占める土器の様相は大和地域の影響を強く受けた南山城地域に共通しており、農地の開発主体を考えていく上で興味深い点です。また、搬入品の多さは古代からの物流拠点としての機能が継承されていた可能性を示しています。

なお、これらの建物群が形成される少し前、9世紀末から10世紀前半頃の溝からこの地域の水田経営の在り方を示す木簡が出土しています。木簡は長さ13.0cm、幅1.9cm、厚さ2mmの杉材で下端は欠損していますが、わずかに先細りしていくと見られ、両面に以下の文字を読み取ることができます。

表面「大日(田)奴良田口口水廿五日

裏面「七月廿四日

表面の不明瞭な6・7文字目を「上溜」と読むと、この木簡の表には「大日の奴の良田へは、上の溜め(池)の水を、この二十五日に入れる」もしくは「止める」、裏にその告知日が記されていると理解することができます。耕作地への用水の取り口に突き刺して使用された用水の取り扱いに関する告知札と考えられ、用排水管理の実態を示す手がかりとなるものです。田上山麓には現在も多くの溜め池があり重要な用水源としての機能を担っています。木簡に溜め池の存在を読み取った場合、この地域においての溜め池灌漑の開始時期を探る糸口になります。溜め池の出現は田上山系の保水力低下との関わりも想起され、飛鳥時代以来の森林開発による山の荒廃時期を推察する資料としても注目されます。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大崎哲人)



写真6 中国製青磁碗と土師器の皿が出土した墓

関津遺跡の発掘調査元年、平成15年度に実施した発掘調査は約8,900㎡にも及びました。見つかった遺構の大半は中世の建物群や井戸などでしたが、飛鳥時代の墨書土器の出土は古代において関津の地が担っていた役割の重要性を示す端緒であり、「田原道」と見られる奈良時代の道路跡や官衙的な建物群の発見へと続く注目される調査成果でした。ほ場整備事業に伴う発掘調査は工事で遺跡が損壊する範囲を対象に実施しており、平成19年5月までの5年間で延べ40,000㎡の発掘調査を行ってきました。しかしそれは関津遺跡のごく一部であり、遺跡の大部分は地元や工事関係者の方々の御配慮により工事が終了した今も地下に現状保存されました。瀬田川左岸の堤防上を走る道路からは新しい田園風景になった遺跡の姿を見ることができます。

この遺跡についての詳細は下記の発掘調査報告書をご覧ください。滋賀県内の図書館などで閲覧できます。

◆『ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書34-2 関津遺跡I』 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007年3月刊行

写真提供：滋賀県教育委員会



写真7 用排水管理を示す木簡



写真8 周辺地割と同じ向きで建てられた掘立柱建物